

『テンプル・オブ・マイ・ ファミリア』への序論

— アリス・ウォーカーの最新の
エッセイ集に見る思想と行動 —

加藤 恒彦

はじめに

アリス・ウォーカーは一九八二年の『カラー・パープル』で世界的に知られるようになって以来七年振りに長編小説を発表した。それが『テンプル・オブ・マイ・ファミリア』(*The Temple of My Familiar*)¹⁾である。この七年の間、彼女は何を考えていたのか、その思想の展開はこれまでの彼女の思想とどのような関係にあるのか、そしてそれは現在の世界の問題にどのように切り込んでいるのだろうか。そのような疑問に答えてくれるのがその間にかかれたエッセイを中心に編纂した『リビング・バイ・ザ・ワード』(*Living by the Word*)²⁾である。この小論の目的はそのエッセイ集を素材に、彼女の精神的な軌跡や問題意識をその展開過程に沿って追求することである。その最大の目的は、『テンプル・オブ・マイ・ファミリア』の世界のいわば外堀を埋めることである。このエッセイ集におさめられた知的営みは、小説世界と一体とはいわぬまでも、深くかかわっているからである。

冬眠から新たな出発へ

アリス・ウォーカーは『カラー・パープル』を書き終えた頃から一つの「精神的みなおしと政治的冬眠」の時期を送ったようだ。その時期彼女は外の世界との接触を断ちきり、個のなかに沈潜し、内省の時間を持った。それは彼女が「頭の天井につきあたたかのように感じた」からだ。彼女は自分の父や母そしてさまざまな血筋からなる先祖と自分との関係、自分が成してきた仕事、身近な家族との関係について振り返る。さらに彼女は「大地への自分の巨大な責任と宇宙への憧憬を少なくとも認知しつつあった」という。いうまでもなくそれは人間としての、作家としての新たな発展に先行する時期であった。その時期に発表された「すべては人間」(1983年)と題するエッセ

イはその間のアリス・ウォーカーの新たな問題意識の重要な一端を明示している。

エコロジカルな関心とインディアン

このエッセイは一九八三年一月にキング牧師の生誕記念の会で読まれたものだが、そのなかでアリス・ウォーカーがテーマにしたのは自然やあらゆる生き物にたいする人間の罪である。化学肥料のために病気にかかった木々、乱開発のために伐採されている樹木への人間の集団的責任、何故なら樹木にとってはすべての人間は一体なのだから。また人間から忌み嫌われ、恐れられ、迫害を受けるヘビ、たとえ無害だと知らされてもおかつ残る恐怖、それは教えられたものなのだ。そしてこの自然への恐怖は人間の自分自身への恐怖、お互いどうしへの恐怖、そして宇宙の精神そのものへの恐怖へと導くのだ、と彼女はいう。

次にアリス・ウォーカーは白人によって金銭のために駆逐され虐殺されてきたインディアンに話を移す。インディアンはヘビと同じように生存権を求めるがその度到手痛い打撃を被ったのだ。そのインディアンはアメリカの自然を敬い、共生しようとした。それに対して白人は大地を犯し、汚してきた。大地は「この世の黒坊」となり、「他者的で、疎遠で、邪悪だととらえられ」たのだ。しかしそのような白人の道を我々はもはやとってはいけない。「進歩」という名のもとで地球上の何百万のひとつの「飢え、悲惨、奴隷化、失業」が起きてきたからだ。そして「進歩」による便利な道具のおかげで我々が勝ち得た自由は際限なく続くテレビのコマーシャル、テレビドラマ、そして殺人をみることなのだ。

我々が考えなくてはならないのはいかにして大地に生き物としての威厳を回復し、当然のように大地を犯し、さん奪する行為をやめるのかということである。我々はみなこの大地の上に住んでいるのだ、樹木も、人間も、ヘビも同じように。そのような道を歩む上で我々はこの大地を愛し、すべてのものが人間であったインディアンたちの古き生き方から学ばねばならない。

このようにしてアリス・ウォーカーの関心は第一に、きわめてエコロジカルな様相を帯びてきている。これは人種問題から彼女が離れたということではない。ヘビにたいするひとつの恐怖は白人の黒人にたいする、伝統によってつちかわれたいわれない感情を容易に類推させるし、大地にたいする「開発」によって「大地がこの世の黒坊」となったという比喩からも、彼女が黒人や女性にたいする抑圧の意識を基礎にして、それを大地への汚染や乱開発の問題への認識に押し広げていることがわかる。

アリス・ウォーカーの関心は第二に、インディアンの生き方へと向かっている。こ

れまでもすでに『メリディアン』(1976年)において白人によるインディアンの土地の収奪と彼らの悲惨な歴史を想像し、彼らの運命に涙し、ついには自分の土地をインディアンに譲ろうとしたメリディアンの父の姿が描かれていた。ここでの新しさはアリス・ウォーカーがインディアンの姿から悲惨な面のみならず、学ぶべきポジティブな面を掘り起そうとしていることである。彼女はインディアンが「しばしば性差別的であり、戦争好きな傾向があり、人間的にも欠陥なしとはしない」とはいいながら、上に見たように白人が自然を征服の対象としかみなかったのとは対照的にインディアンが自然を愛し、すべての自然のなかに人間的なものを見た点に共感しているのである。

自然のなかに一種の精神性を認めるという傾向もアリス・ウォーカーのなかにはすでに見えていた。『メリディアン』におけるソジャーナの木のエピソードがその代表であろうか。そしてそれは『カラー・パープル』においては一層顕著となっている。そこでは自然は一種の神として位置付けられていた。それがここでは明確にインディアンの宗教観を取り入れるかたちでより明確になり、同時に地球の汚染や乱開発を批判する哲学的な基礎となり彼女の思想のなかに明確な位置を占めているのである。

このようなアリス・ウォーカーのインディアンへの関心は彼女の母方の先祖にチェロキー・インディアンの血が混じっているという家系的な要因もある。彼女はそれを単に一つの過去の偶然として自分から切り放すのではなく、自分のなかにインディアンの歴史を受け止めそれを自分の未来に結合させようとしているのだ。アリス・ウォーカーにとっては伝統から切り放された一個の自分という考えはまったく存在しない。この「精神的みなおし」の時期にあってインディアンは彼女の意識のなかに強く存在した。しかもそれは単にインディアンの歴史、文化遺産への関心、収集にとどまらず、かれらの闘争への連帯や交友関係の樹立にまで発展していた。「私の兄さんのビル」というエッセイにはそれが詳しい。

アリス・ウォーカーとインディアンとの絆

彼女がビル・ワベバと出会ったのは彼女が政治的冬眠から目覚めかけていた八四年の秋のことであった。インディアンの運動組織の指導者の一人デニス・バンクスの裁判に一証人として出席したアリス・ウォーカーは友人から彼を紹介され、その後、「国際インディアン協定会議」のための資金収集に協力をたのまれ快く引受け、それ以後も共にいくつかの仕事をおこなったのだ。この組織は世界各地のインディアンの連帯と闘争のための組織だった。アリス・ウォーカーはそのような組織について「それはこの地球でおきていることのなかで最上の出来事の一つだと思われた」と述べて

いる。またこのビルの死を追悼する文章の最後でアリス・ウォーカーは、「我々の間には、或る意味ではすべての先住民は、母なる大地への愛着とアメリカの白人、スペインの征服者、南アのアフリカーナとの体験によって一体であるという共通の直感的な認識にもとづく特別な親しさがあったのだ」と述べている。ここには公民権運動に始まる彼女の運動とのかかわりによって獲得された黒人体験、アフリカ黒人との連帯精神が核となりインディアンとの連帯感情に発展していることが示めされている。しかもそれは、インディアンにとどまらずすべての被抑圧民族との連帯や一体化の感情にも展開して行く。

食物と自然な死

インディアンの生き方や思想へのアリス・ウォーカーの関心に話の重点がかなりかかってしまったが、次に、それとも関連した彼女のエコロジカルな関心の展開に進もう。自然との共生という考えは彼女の育った農村的生活の新たな見直しにつながり、現在の都市生活への批判的考察を生み出している。「老衰で死ぬことへの憧れ」という一九八五年に発表されたエッセイのなかでアリス・ウォーカーは百二十才まで生きた先祖がいたことを想起し、それが可能であった原因を、自分が育った農村での食生活に探っている。

だれもその当時店から食物を買う必要がなかった。みんなが野菜畑をもってそれで食事をまかなっていたのだ。しかも肥料はすべて家畜の糞であり、化学肥料は使われていなかった。その当時ガンにかかったという人間を聞いたことがなかった。ガンは北部、それからアトランタ、そして近郊の町というように外からやってきた病気であった。ところが二十年後の現在ではガンは住人となり若者でさえガンで死ぬようになった。その間かつての生活は姿を消していたのだ。知っているかぎりの人々は農村を離れ都会や町に移らざるをえなくなり、野菜畑をもたず、もっている場合でさえ化学肥料にたよらざるを得なくなっている。というのは家畜もいなくなったからだ。そうした生活の変化に直面して黒人のもと農民たちは、どうして店から食べるものをおかなくてはいけないのか、どうしてそんなに高いのかそしてまずいのか、とさまざまな疑問をいただく。人々はスーパー・マーケットで買ったキャベツが水みたいな味がするという。食べ物の味は宇宙が人間に送る最もあからさまなメッセージなのだ。そして我々はこれまでにすでに何トンもの汚染された警告を食べてきたのだ。私が子供の頃、人々はまだ老衰で死んだものだ。実際老衰で死ぬのが普通のことだった。最近私は周囲の人々にみまもられながら、安らかに死んで行く老人を故郷でみた。それは

素晴らしい死に方であった。己づから引き起こした病のために惨めな死に方をするということは実は異常なことであり、それを我々は普通のことだと考えているのだ。だが我々は別の死に方があることを子供たちに教えなくてはならない。老衰で死ぬことは一つの権利とならなくてはいけないし、それはまたこの地球を守ることにもなるのだ。

アリス・ウォーカーは彼女自身の身近な生活の変化を新たな視点で振り返りながら、汚染された食物を食べさせられる現在の生活を憂慮し、自然な死、老衰による死を人間の権利にまで高めている。

馬のなかの人間

他方、アリス・ウォーカーは人間と自然との関係についてもやはり身近な体験を基礎に、「すべては人間」で展開された思想を発展させている。それはブルーという白馬と彼女との体験を綴ったエッセイ「私はブルー（気が滅入るの意味が掛けられている）なのか」である。彼女の住んでいるサンフランシスコの郊外の家は牧場と隣接していて、そこにはブルーという馬が一頭放牧されていた。彼女はブルーによくリンゴをやったのだがそのうち馬にも深い感情があることに気づく。その馬はひどく孤独で、退屈していた。しかし或る日、もう一頭の雌馬が連れてこられる。二頭は友達になり、牧場を駆け回る。彼女はそのようなブルーに生じた変化に気づく。ブルーは今や独立心、自信、馬らしさにあふれていたのだ。やがて雌馬は妊娠し、或る日連れ去られる。彼女は一人残されたブルーの目の表情を見て「もしわたしが奴隷制のもとに生まれ、わたしの連れが売られるか殺されるかした場合には、わたしの目もそんなただだろう」と記している。ブルーは奴隷制度のもとでの黒人男性と同じようにつがわされたのだ。その後ブルーは気が違った人間のように感じた、と彼女は書いている。そしてそれ以後ブルーの表情には絶望感、人間にたいする嫌悪、憎しみの感情が表われ、内面の奥に閉じ籠ってしまうのである。

前にヘビを話題にしたときと同じようにアリス・ウォーカーは馬の悲惨な体験に黒人体験を投影している。馬の表情を読む上でそれが理解を助けているともいえよう。それだけではない。東洋の女性と結婚し初めのうちは幸せだといっていたアメリカ男性が、やがてその女性が英語をしゃべるようになると別れてしまう、という沢山ある例を上げ、アメリカ男性はその女性の心の姿を無視し、自分の勝手な想像を相手に押し付けていたのだ、と批判している。それと同じように人間は馬の感情の世界を無視し、牧場に遊ぶ馬の姿から自由という勝手なイメージを投影するのだというのである。

このようにしてアリス・ウォーカーの想像は人間世界と動物の世界を自由に駆け巡り両者の間に共通性を見出す。彼女はこのエッセイの最後で「いつの日か実現されるべき全てのものにたいする自由と正義について語りながら食卓につきステーキを食べるのだ。わたしはかわいそうな生き物を食べているのだ、と最初の一口をほおぼりながら思った。そして吐き出してしまった」と述べしめくくっている。こうして彼女は他のエッセイにも表われているように肉食主義、海草を初めとする海の幸を食事にとり入れる方向へと近付いて行くのである。

父 親

八四年に発表されている「父親」というエッセイもまた「自己のみなおし」の時期から生まれたものと思われる。彼女にとって父について語ることは母親について語ることに同様に自己解放的行為だというのである。何故なら自分は父親とよく似たところを沢山もっているので自分にとって父親が何を意味したのかを知ることは自分を受け入れ愛するということのなかで決定的な重要さをもっているというのだ。

アリス・ウォーカーと父親との関係はあまり親密なものではなかったようだ。だが父が亡くなったいまとなると、大人対大人の立場で話がしてみたいと思うようになったという。彼女が父親と親密ではなかった一つの原因は、父親が彼女の姉を愛さなかったからだという。彼女自身は父親に可愛がられたが、姉のことがあったために自分が父親に愛されることを許せなかったのだ、という。そしてそれは男女の愛においても持続し、自分は結婚している男性に自分のためにその妻を捨てさせることをどうしてもできない類の女だ、という。

幼いころの父親の思い出で彼女の心に残っているのは、彼女が果物の入ったビンを壊してしまった時のことだ。そのことで彼女は父親から質問を受けるのだが、その時彼女は父親が何にもまして本当のことを彼女が告白するのを望んでいると感じた。そして本当のことを告白することによって父の感情に安堵の表情が浮かび、罰を受けなかったことを覚えているのだ。そしてそれを機会に彼女は本当のことをこれからも言おうと決心する。これは彼女が父親から得た貴重な教えであった。

だがそれから少しして彼女が兄と喧嘩をしている最中に父親が帰ってきて理由も聞かずにふたりをベルトで殴りつけたことがあった。喧嘩の原因は兄にあり、それにもかかわらず自分も罰を受けたという不当さが、父親の道徳的な墮落にたいする失望が、父親にそのような感情を持ち続けることの苦しさとともに残った。しかし彼女が大学生の時、妊娠してしまったものの墮胎が法律で禁止されていたために苦しむという経

験の後、父親への態度が変化したのだった。それは「自分たちのことを考慮にいれない政治のもとで住むことのためにどんなことをしなくてはならなくなるのか」がわかったからだ、という。

彼女の父親は八人の子供をもうけたが最初の四人と後の四人は別の母親から生まれた。アリス・ウォーカーはあとの四人の最後に生まれたために若い頃の父親を知らなかったのだが、一九三十年代にあって彼はイートントンで最初に黒人に投票権を要求した人々の一人で、貧しい小作人たちを組織するために努力し、黒人にとっての教育の意義を信じ、地方の学校を支えるためにも努力したのだ。しかし彼女が父親を知ったころには「彼は教育も政治にも恐怖を感じ、同時にそれらに失望と恨みを感じるようになっていた」。それは彼が命と生活をかけて投票したにもかかわらず、何も変わらなかったからだ。そして教育は子供が自分により批判的になるという結果しか生み出さなかったと思われたからだ。六十年代に入って彼女が大学からもどり故郷で公民権運動をやろうとした時、そのことを両親には一言もいわなかった。彼らがそのようなことに関心をもつとは思いつかなかったのだ。しかし彼女は自分自身が法によって避妊を禁じられたために負った苦しみから制度的抑圧のために父親が何を被ってきたのかを理解することが初めてできたのだ。

また父親が彼女の姉を嫌ったのにも原因があった。父親の母は、彼が十一才の時に彼女を愛すると称する男に殺され、そのため彼の父親は酒を飲み、子供をこわがらせた。そのような体験のために父親は、生まれた娘の一人が殺された母にあまりに似ていたために、心理的混乱からその娘を愛することができなかったのだ。

このようにしてアリス・ウォーカーはかならずしもうまくいかなかった父親との関係を、個人的なレベルを越えたより大きな関係のなかでとらえることによって理解し、愛そうとする。そして彼女は民主党大会で演説するジェシー・ジャクソンの演説にラジオで必至に耳を傾けている自分に父親の姿をダブらせるのである。

『カラー・パープル』批判への反論

「精神的みなおし」の時期、彼女がぶつかった問題の一つは『カラー・パープル』への黒人からの思いがけない厳しい批判であった。それに彼女は少なからぬ失望や悲しみを味わった。だが彼女はそれらの批判が真に的を射たものであるのかどうか、自らをも振り返りつつ、批判的に吟味する。それが結実したのが次の二つのエッセイだ。一つは一九八四年に発表され、もう一つはその二年後に発表されている。興味深いのは扱っている問題が変化しており、彼女の問題意識の変化を見ることができること

ある。

「寒い戸外から部屋のなかへ」と題する最初のエッセイはカリフォルニアのオークランドにすむグリーンという黒人婦人がこの作品を学校から追放するよう教育委員会に提案し、マスコミを騒がせたのだが委員会で検討された結果、作品には問題はないという結論がだされた事件に触発されて書かれたものである。

何故グリーン婦人はこの作品を禁止すべきだと考えたのだろうか。アリス・ウォーカーはそれを、性描写が露骨であること、黒人の描き方がステレオタイプ化されていること、彼らが使う言語が南部の黒人方言であり、それを読者にさらすことによって黒人の品位を下げることになっている、という点にまとめている。

性描写の露骨さについてアリス・ウォーカーは、その批判が、作品の最初の部分の幼いセリーにたいする義理の父親によるレイプの場面の描き方から来ている、としたうえで、反論の焦点を彼女のレイプの描きかたの真実性にもとめている。レイプはわくわくするものではないし、レイピストも魅力的ではない。逆にそれは残酷で深い傷を子供の心に残すものであることを子供の立場から子供が使う言葉のままに描いたものだ。グリーン婦人がびっくりしたのはその真実の恐ろしさなのだ、何故なら現実は何千、何万という子供がそのような恐ろしい目にあっているからだ、というのである。

さらにアリス・ウォーカーは、セリーが自分への虐待を楽しんだと書くこともできたし、またその体験を多くの読者が正常だとしてうけいれたであろうような奇麗で、あまり露骨でない言葉で描くこともできただろう、だがそれはセリーを裏切ること、単に彼女のレイプ体験のみならず、彼女の人生の潔癖さ、彼女の人生そのものを裏切ることを意味しただろう、という。

さらに彼女は黒人をステレオ・タイプにおいて描き、それを方言で表現したという批判について反論する。まず彼女が例として取り上げるのはマミーという言葉とそれによってイメージされる黒人のステレオタイプである。彼女の戦略は本当の黒人にとってのマミーと白人によって戯画化され黒人がそれをきくと恥ずかしく思うマミーとを区別し、本当のマミーを歴史から掘り起すことである。彼女は『カラー・パープル』のなかでマミーという言葉を意識的に用いたという。言語的にみてもマミーはもともとアフリカ起源の母親を意味する言葉であり、二十世紀初頭の南部でつかわれていた言葉であるが、後に現状に満足し、白人のためによく働く太った黒人女性というイメージに利用され、流布されたのだ、という。それにたいして本当のマミーは奴隷制度のもとで一日の仕事に疲れ果てた後も、なお白人のために、自分の子供がもつローソクの光りで糸を紡ぎキルトを作らねばならなかった、という。したがって、マミーとい

う言葉の歴史からわれわれが学ぶべきことは、人種差別的なステレオタイプに反撃する道は、マミーという言葉を使わないことではなく、それを本来の文脈において使うことによってその本来の意味を明らかにし、ステレオタイプの虚偽性を明らかにするべきなのだ、という。そしてさらに重要なことは過去を忘却の淵に投げ捨てるのではなく、それを現在において保存することである。そしてとりわけ文書による記録をあまりもたない黒人の場合には声、特有の語り口をもって伝えられてきたものを大切にしなければならない。もちろんわれわれの言葉は、それが主流の文化と対立する文化を表現していたがために抑圧されてきたのだ。だから先祖の言葉を聞かせることは、我々と白人の文化の間の対立の根深さを明らかにすることなのだ。

このようにしてアリス・ウォーカーは、ステレオタイプ化され、笑い物にされてきた黒人像を批判し、本当の黒人の姿を過去から救い出す必要、そして同時にその姿が表現される媒体としての先祖の言葉、語り口、抑揚などを再現することの意義を主張し、そのような御膳立の上で、『カラー・パープル』のセリーの言葉はアリス・ウォーカーの義理の御祖母さんのものであり、「黒人はそんな喋り方はしない」という黒人の女性雑誌のある編集者の言葉にもかかわらず、セリーは確かに存在したのだ、と断言する。そしてセリーの声を抑圧することは彼女を完全に抹殺することなのだ、という。逆に、セリーのような虐げられた存在とその言葉への抑圧を許さず、彼女に地球上のさまざまな社会において正当な位置を与えることができればこの世界も違った場所になることができるのだ、という。アリス・ウォーカーはレゲエ歌手のボブ・マレーの歌から引用しつつ「体制が兄弟を殺すのを許してはならない」という。さらに「一つの扉が閉じられたら、ほかの多くの扉が開かれるのを知らないのかい」という別の引用にことよせ、「体制はわたしが生まれるずっと前にセリーのように喋る人にたいして扉を閉ざしてきた。今日彼女の声に耳を傾けることができる人はみな、われわれの心やわれわれの社会の閉じられた扉を広く開け放つのだ」、という。そして「セリーが抑圧と、自己嫌悪と、拒絶という寒さから部屋のなかにはいつて来る時、そしてその場合にだけわたしも、そしてほかの多くの人々も部屋のなかに入るのだ」。そしてすべての人が部屋に入り、おたがいに抱き合った時、（そのような世界を我々は早急につくらねばならないし、それに失敗すれば、軽薄な相互尊重のために死ぬことになるだろう）、われわれがかつて知らなかったような喜びに満ちた世界を残すことができるだろう、という。その意味で先祖の声を現在に生かすことは我々の生き方にかかわる問題なのだ、という。

最後にアリス・ウォーカーは『カラー・パープル』にたいする非難に気分が落ち込

んだ時、夢にさまざまな先祖たちが表われ、彼女の仕事を肯定してくれたと語っている。或る日表われたのは「肌が真っ黒で、どっしりとした婦人で、彼女は野良仕事で中指を二本失っていたのだが、その女性はアリス・ウォーカーを「娘よ」と呼び、『カラー・パープル』を替めてくれた」、というのだ。

次のエッセイは二年後、一九八六年に発表されている。これは『カラー・パープル』のミスターの描き方にたいする黒人男性からの批判にたいする反論を中心的な内容にしたものだ。

彼女は、黒人の男性のなかには女性にたいする差別や抑圧が存在していることに気付いていない人々や、気付いてもそれをできるだけ少なく見積もったり、その問題から注意をそらそうとする傾向がある、という。彼らは男性が女性にたいする差別と抑圧を描いた本を読み、それを止めようとするよりは、抑圧されているのは自分たちなのだと主張するのだ。『カラー・パープル』への批評において起こったのはまさにこのことだ。

彼女は黒人男性の批評が白人の人種主義者から自分たちが批判されるのを恐れるあまり、ミスターの描き方をきちんと分析していないという。ミスターを彼女は深く愛しているのだ、という。もちろんそれは彼の卑劣さや、女性への抑圧や、粗野さのためではなく、「深く反省し自分を変える勇気をもったからである」。セリーにしてもミスターにしても変わるまえの彼らは一種の病にかかっていたのだ。そして両者は成長し、変化し健全となったのだ。セリーはより自分に関心をもち自己主張をするようになり、ミスターはより相手のことを思いやるようになった。

アリス・ウォーカーは、誰にでもすぐわかり、そして多くのことが書かれている黒人社会での性的虐待の現実を否定したり、黒人男性はミスターのように振る舞わないし、もしそうしたとすれば、それは人種的抑圧のせいだ、という主張の根底には心の奥に密む苦痛にみちた事実を認めまいとする態度が存在する、という。その事実とは、われわれ黒人は奴隷の末裔であるばかりでなく、奴隷主の末裔でもある、ということである。だから奴隷根性を脱却せねばならないのと同じように、われわれは、奴隷主や奥様でありたいという欲望を根絶しなくてはならないのだ、という。

小説でいえばミスターには白人の奴隷主の血が混じっている。ミスターの父親は奴隷主の息子であり、そのために彼はあのプランテーションを手に入れたのだ。ミスターは彼の女と子供にたいする扱い方を彼の父親から学んだが、父親は奴隷主の彼の母親と自分にたいする扱いからそれを学んだのだ。ミスターの父親は奴隷主から黒人であることを軽蔑する価値観を受け継いだ。彼がシュッグを表現する「あいつは黒くて、

ちじれ毛で、バットみたいな足をしている」という言葉は奴隷主が黒人女を形容するときの表現なのだ。だがミスターはシュッグを愛した。彼のなかには母親の愛がながれており、そこに彼がすくなくとも自分を愛することのできる可能性もあったのだ。

われわれは奴隷制度のもとから自由になったがそれはおたがいに所有者と被所有者の関係にあることをやめさせるためでないとするれば、一体何のためであるのか。

さらにアリス・ウォーカーは黒人のなかには白人の血も流れているということの意味をさらに展開する。すなわち、われわれの成長にとって決定的に重要なことは、われわれが北アメリカの混血児なのだという現実である、という。すなわちわれわれは黒人であり、白人であり、インディアンなのだ。そのうちの一つだけを受け入れることは精神的な病に通じるのであり、それは黒人を排除してきた白人を見れば良いと言う。

さらにアリス・ウォーカーは問題を自分の体験のレベルに移し、自分の先祖に流れる白人の奴隷主の存在との自分の内面での闘いについて触れる（インディアンの血についてはすでに触れたように、彼女はすでに自分のなかにとりいれていた）。彼女はそれを詩にしていたのだ。彼女は自分の心のなかでその白人のレイピストが彼女に認知を求める叫びを聞き、拒絶してきたのだが、そうすることの精神的な代償、それが性格を歪める危険に気付いたのだ。

さらにその詩を読んで、先祖が白人によってレイプされたと宣伝し、かつ白人の血が混じっていることに関心をもち、他方黒人であることを恥じる態度があると批判した黒人男性の批評家に反論しつつ、アリス・ウォーカーは「自分が心をそとに広げ、わたしの心とそのさまざまな構成要素を認め、危険を犯し、すべての人びとを肯定することができたのは、黒人である、つまり皮膚の色というよりも、わたしを育てあげてくれた文化という意味での黒人であるためなのだ」と述べ、さらに続けて、わたしの先祖がレイプと出産に耐えることを強制されたのなら、わたしはすくなくともそれについて言及し、そのことによってその先祖の人生を想像することが可能になるのだ。そしてそれはわれわれすべてにとって重要なことなのだ、という。このようにしてアリス・ウォーカーは、已づからのアイデンティティについて「われわれはアメリカ人であり、奴隷商人である。われわれはインディアンであり白人なのだ。われわれは奴隷主であり奴隷なのだ。われわれは女性であり男性であり子供たちなのだ」。そしてそうした先祖たちは奴隷制度のもとで、奴隷主も奴隷もともに苦しみ、その苦しみによってわれわれはおたがいへのやさしさを買取ったのである、と締め括っている。

このエッセイには補遺が付け加えられている。発表されたのは一九八七年となって

いるのであとで書き加えられたものと思われる。そこで論じられているのはレスビアンの問題である。つまり多くの批評家はミスターの描き方を批判してきたが、実は黒人男性の女性にたいする残虐な行為を描いた映画はこれまでもあったし、それを黒人の男性は喝采して見てきたのだ。彼らが本当に反対しているのは、あの作品のなかでの黒人女性たちの態度なのだ、という。何故ならあの小説や映画においてはなにをさておいても女たちは自分たちの行動計画をもっており、女を虐待する男に屈服することはそのなかには含まれていないのだから、という。そして、「女が女を愛し、しかもそう欲するならばそれを、公然と表現するのは、だれにとってもそうであるように、女にとっての自由の不可欠の部分なのだ。もし愛を自由に表現できないのなら奴隷と同じだ。もし自由に愛を表現することをさまたげ他者を奴隷化しようとする人がいれば、それは奴隷主的精神の持ち主である」、といいはなっている。こうしてアリス・ウォーカーはレスビアニズムを女性の自由の一環として明確に位置付けている。

レスビアニズムについて

同じく一九八七年に書かれた〈奇妙なことにこのエッセイだけには発表雑誌が記されていない〉「すべてのお髭の女神たち」と題するエッセイのなかで彼女はこれまでの人生を振り返りながら、レスビアンやホモセクシュアルの人々を扱っている。

50年代に南部の田舎で育った彼女は、大人になるまで黒人と白人以外の三つのグループ、つまりユダヤ人、インディアン、そしてホモの存在に気付かなかったという。そうした人々は存在したのだがさまざまな形で見えなくされていたのだ。大学時代にもホモについての冗談は聞くことはあっても彼女にはよく理解できなかった。彼女が意識し積極的に闘ったのは黒人排外主義を背景とする白人との結婚にかんするタブーであり、彼女は白人と付き合い、ついには白人と結婚した。彼女が男性どうしや女性どうしの愛について知ったのは友人のもっていた小説を通じてであった。そして大人になり彼女自身が人種や民族を越えてさまざまな女性や男性に引かれることによってそのような感情を理解するようになったという。

そうしたなかで彼女はレスビアンの友人と自分の間に存在する深い溝に気付き悩むようになる。というのは女性にたいする性的な愛の感情は非常に秘められたものであるために、他のどんな問題でも彼女と話あえる友人でさえその問題について彼女に打ち明けることは決してなかったのだ。その友人にとって恐らくは一番重要な側面について自分は打ち明けられないという事実が彼女に深く傷つき、侮辱されたと思ったという。しかしそのことへの怒りのおかげでそれまで自分の身の回りにあったにもかか

わらず見えなかった世界が見えてきたという。

もう一つの体験は彼女と彼女のパートナーとレスビアンとの友人たちとの関係に生じた問題である。彼女は七十年代の終りに一緒になったパートナーとともにサンフランシスコにやってきたのだ。彼女は男性たちの最悪の姿を見てきたにもかかわらず、一人の男性に深い愛をいただいていた。そして彼女はレスビアンとの友人が彼女のみならずパートナーも含めて受け入れてくれることを望んでいた。彼も彼女同様レスビアンの「独立心、勇気、自己充足性や能力、男性に支配されることへの拒絶、女性への愛」を愛していたのだ。そしてふたりとも「女性が女であるというだけで抑圧され日常的に自己表現を否定されているような異性関係をいつも見ていたので、自己を自由に表現したいという女性が愛人として他の女性を選択することはよく理解していた」。にもかかわらず、レスビアンの友人が彼女を訪れるとき彼が同席しないことが求められるという事態が生じた、というのである。それはふたりにとってきわめて大きな苦痛であったという。ふたりとも六十年代の黒人の運動のなかで生じた白人を排撃する分離主義の時代を体験していたため、レスビアンの友人の気持を理解することはできた。男と寝ている女など信用できない、ということであり、それは白人と付き合っている黒人など信用できない、という気持と同根なのだ。そしてふたりはそのためにひどい孤独のなかに投げ出される。しかしやがてそのような狭い考えではいけない、という考えが生まれたという。すなわち自分が絶対的に自由であるためには人種や民族や性を越えてすべての人を自分のなかに含みこまねばならない、という考えに到達したという。だから彼女は黒人にもレスビアンにも、「すべての人を愛するという傾向をもった自分を受け入れて欲しい、もしそうでなければ構わないでくれ」という態度を明確にした、というのである。その結果、何人かの失った友達をとりもどした、と彼女は語っている。

彼女はまたサンフランシスコのゲイと呼ばれる男性についても、「彼らのおたがいにたいする愛情は男性の可能性について喜ばしい何かを語っている」といい、ハロウィンの祭りの時などさまざまな意匠をこらして道を歩く彼らを見ると、ナチの服装をしているものなどは別にして、同性愛の悪についてあらゆることを教えこまれながらも、おたがいを愛する権利を確固として肯定しているそうしたすべての男たちをみるとうれしくなる、という。だがエイズのためにかつての陽気さが失われ、一つの文化が危機に瀕している状況を悲しみつつこのエッセイを結んでいる。

アリス・ウォーカーと政治活動

最後に紹介したいのは一九八七年六月の日記である。ここには「政治的冬眠」から抜け出たアリス・ウォーカーの生きいきとした政治との関わりとその根底にある思想を知ることができる。さらに興味深いのはこの時期彼女は最新の長編小説『テンプル・オブ・マイ・ファミリア』（一九八九年）をほぼ書き上げつつあったことである。つまりこの日記からは、これまで紹介してきたものと同様に、彼女の創作の背景に生きづいている重要な要素を知ることができるのである。

日記は友人からの早朝電話への言及から始まっている。彼女はその二日後、エル・サルバドールに平和をもたらすために闘ってきた六人の勇敢な人々を表彰するための集会でエルサドバドールから亡命してきた勇敢な婦人にピース・オスカーを渡すことになっていたのだ。ところが、電話によるとある男から脅迫電話が入り、その運動が共産主義と関わらないとかどで、集会所に爆弾を仕掛けたというのである。そこで、その集会の関係者がそれぞれ集会に参加するかどうかを決めて欲しいというのが用件であった。彼女は六十年代から今日にいたるまでの合衆国における爆弾事件を思い起こす。それは今日に始まったわけではないのだ。そして共産主義がその口実につかわれるのもそうだ。彼女は至急弁護士と相談し、遺書を書き上げておく。彼女は、「素晴らしいが、また普通の人々でもあるそうした人々をたたえるためにそこにいないことなど考えられなかったのだ」という。

だが思いが書きかけの小説の運命に向かうのも必然であろう。仕上げられるまえの荒削りな部分を読者に残すのもまた良からう、と彼女は判断する。そして先週書いておいたノートに目を通す。そこにあったのは「わたしはニカラガ人、わたしはエル・サルバドール人、わたしはグレナダ人、わたしはカリブ人、わたしは中央アメリカ人」という言葉だった。そして彼女は自分がその言葉にこめた意味を考え始める。それは結局南部ジョージアの片田舎に貧しい黒人の小作人の娘として生まれ、公民権運動を闘ってきた体験を想起することであり、それを通して現在貧困と抑圧にたいして闘っている人々を理解し、連帯することである。「それは同じ精神なのだ。人間性をほとんど粉々にされながらもそれでもなお岩のように雄々しくたち、吹き飛ばされることを拒否する人々の精神なのだ」という。

しかし、なお、彼女は今年、自分の両親と御祖父さんや御祖母さんが一生はたらいで払ったよりも多くの税金を払ったという。しかもその半分近くは武器を買うことに費やされるのであり、その武器は家の近くの港から運ばれて行くのだ、と憤る。実は、

このような考えは彼女がコンコード海軍兵器庫の門を閉鎖するための直接行動で逮捕される数日前に彼女の脳裏をよぎったものだ、という。

彼女がその行動に参加したのは六月の一二日のことである。その港ではかつて第二次大戦の時、荷積み作業の際に爆弾の爆発事故で二百人の黒人が吹き飛ばされ、その後、同じ仕事を要求され、拒否した黒人が投獄された歴史があった。パートナーのアレンはその歴史を書いているのである。実は広島に落された原爆が出港したのもその港であった。そしてそれ以後もその港からベトナム、ニカラガ、そして今ではエル・サルバドレに武器が出て行くのである。

デモや逮捕されてからのことは省略しよう。大事なことはアリス・ウォーカーが中南米の人々の闘いに政治的行動においてもコミットしているという事実だからである。

夢

最後に簡単にアリス・ウォーカーにとっての夢の持つ重要な意味についても触れておく必要があるだろう。八四年の日記のなかでアリス・ウォーカーは「宇宙はなんとすばらしい夢をわたしに送ってくれることだろうか」とその朝方見た、双頭の女性がでてくる夢を紹介している。その夢は予言的である。また『カラー・パープル』が心ない批判を受けた時にも彼女はよく夢を見ている。それはさまざまな先祖や身も知らぬ人の姿をとり、彼女の仕事をほめ、慰め、勇気づけたのだ。また彼女は自分の先祖の一人で、白人の奴隷主として彼女の先祖を犯した男が、彼女の心のなかに入れてくれと叫ぶ声に悩まされたがその時にも夢でその男の姿を見ている。アリス・ウォーカーの夢は彼女の豊かな想像力と一体のものとして、彼女の深層の意識をみごとに具象化するものであり、歴史と現実にせまる有効な媒体となっている。

まとめ

以上、このエッセイ集に表われたアリス・ウォーカーの精神的軌跡と主要な問題意識を追ってきたが最後にそれを以下のようにまとめておきたい。

第一に、精神的見直しの時期において、彼女は公民権運動に発する黒人と女性解放の生き方を再確認するとともに、その体験を基礎にヴィジョンをより拡大している。その道筋は自分の先祖を形成する黒人はもとよりインディアンや奴隷主の白人までを含んでみずからの心のなかに場所を与えることに始まり、世界の問題をより広く自分の問題としてとらえる方向をとっている。したがっていまではアリス・ウォーカーの視野は黒人問題やフェミニズムにとどまることなくインディアン、ラテン・アメリカ、

カリビアン、アフリカンなど第三世界の被抑圧民族、さらにはレスビアン、ゲイへと拡大され、不当な差別、人権侵害、貧困に置かれている人々との精神的連帯と一体化へと進展しているのである。

第二に、核戦争による人類とこの地球の破滅、そして産＝軍複合体による地球の乱開発と汚染にたいする深刻な危機意識が新たな問題意識として中心的な位置を占めるにいたっている。そしてそれと並行し、かつそれをささえているのが、あらゆる自然のなかに生命と神秘と神聖さを見出す思想である。それは彼女がインディアンの自然観から学んだものである。そうしたなかで馬、犬、へビ、鶏そして樹木と彼女とのコミュニケーションの体験で描かれ、同時にそれは白人と黒人との間の人種関係、偏見の問題とも結びつけられて論じられる。さらにそれは食生活における変化、食肉主義から菜食主義の変化や海の幸への新たな挑戦ともなり、ライフスタイルの変化ともなっている。これはアリス・ウォーカーの関心の新たな側面の一つとなっているといえよう。

第三に、自然観における神秘主義は夢のもつ大きな意味への注目となっている。しかしこのような観念論はアリス・ウォーカーにあってはヒューマンで豊かな想像力と結合し、心の深層部における過去と現在との有益な対話の場となっている。

注

- 1) *The Temple of My Familiar*, Harcourt Brace Jovanovich, 1989.
- 2) *Living by the Word*, Harcourt Brace Jovanovich, 1988.

要約

This is an analysis of Alice Walker's latest collection of essays. Main points I have made in it can be summed up as follows:

Firstly, in the period of her 'spiritual reassessment', which followed the publication of *The Color Purple*, she not only reaffirmed her position for the liberation of Black people and women, but also enlarged it in the direction of solidarity with the people of the third world such as Native Americans, Africans and Latinos. Thus what she called the 'political hibernation' was replaced by active political commitment for the liberating cause of Native Americans, South Africans and the the people of Latin America.

Secondly, a serious concern with ecological problems which are threaten-

ing the existence of this planet itself, is now occupying her mind along with Native American's spiritualism which, in contrast with white philosophy of domination of Nature, seeks peaceful co-existence with it. And this led her to a change of her eating and living style.

Thirdly, mythic and historical imagination together with dream is playing a greater role in her mind which, though represents idealistic inclination in her mind, still contributes to a rich dialogue between the hidden past and the present.